View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

Title	金子みすゞの「死の理解」とスピリチュアリティの一考察 : 作品『雪』を中心にして
Author(s)	窪寺, 俊之
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.60, 2015.12 : 79-102
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5692
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

金子みすゞの「死の理解」とスピリチュアリティの一考察

――作品『雪』を中心にして

窪寺俊之

一　はじめに

本稿は金子みすゞの作品「雪」を中心にして彼女の「死の理解」とスピリチュアリティの関係を明らかにすることを目的にしている。金子みすゞは若くして西條八十から「若き巨星」と言われながら、二六歳で自ら生命を絶った。[1] 彼女の自死と宗教の関係については拙論を他所ですでに発表している。[2] そこでは彼女の自死の原因を心理学的視点から明らかにし、宗教がどのような機能を果たしたかを考察した。本稿は彼女の「死の理解」とスピリチュアリティの関係を扱う。

金子みすゞは家族や親しい友人との死別や離別など困難の多い人生を送った。結婚直後から夫婦関係は悪く、離婚になった。娘ふさえを自分の手で育てることを願ったが、元夫宮本啓喜は養育権を主張した。ついに彼女は元夫が娘を引き取りにくる日の前日に自ら死を選んだ。彼女は死をどのように理解したのだろうか。彼女の死の理解を作品「雪」を

基にして明らかにする。また、彼女は仏教の影響を強く受けて育ったにもかかわらず、彼女の作品は特定の宗教（例えば、仏教、キリスト教など）に傾いていない。本稿では作品「雪」に見られる彼女の宗教的世界についても明らかにしながら、特定の宗教を超える彼女のスピリチュアリティの特徴を明らかにする。

彼女の作品には弱いものや下積みに置かれたものへの優しい眼差しが見えるが、それを仏教の影響と解釈する研究者がいる。姫路龍正は「私はみすゞの詩情の原点は、彼女の詩の底に流れる仏教的素養と特に浄土教的視点に目をむけなかったならば、その真髄を味読することができないのではないかとおもっています」という。[3] また、酒井大岳も作品「金魚のお墓」には仏教の「観」を見て、金子みすゞの中にこの「観」が働いていると語っている。[4] 彼女の生まれ育った仙崎（現在の山口県長門市仙崎）は昔から仏教が盛んな所であり、浄土真宗、浄土宗、法華宗などの六つの寺院と、二つの神社があり、仙崎の向かいの青海島には鯨墓が残っている。[5] また、彼女の祖母や母は熱心な浄土真宗の信徒であり、彼女は日常生活で仏教の影響を受けていた。彼女が作った五一二編の詩には、仙崎の仏教文化や仏教的家庭環境の影響が見える。作品「雪」では、青い小鳥が誰も知らない野で死に、その夜雪が降って死体を葬ったとある。ここでは青い小鳥の死の葬りをする雪の優しさが仏の慈悲と重なってくる。ところが、この作品では阿弥陀仏、極楽浄土という仏教用語は用いず、「神さまのお国」が使われている。彼女の宗教的世界はどんな世界だったのだろうか。

実際、彼女が残した五一二編の作品には仏教用語とキリスト教用語が混在している。このような宗教用語の混在は用語の明確な定義をしないで使用する曖昧な使用法として非難されるかもしれない。しかし、そのような非難は正当だろうか。以上のような疑問を解き明かすために、本稿は彼女の「死の理解」と特定の宗教に縛られない「スピリチュアリティ」の関係を明らかにする。

本稿の論述は次の通りである。

第一章　はじめに――本稿の目的と論述順を述べる
第二章　スピリチュアリティとは何か――一般的解釈と本稿の機能的理解について述べる
第三章　作品「雪」の紹介と解釈
第四章　作品「雪」の死観と死後観を述べる
第五章　金子みすゞのスピリチュアリティ
第六章　結語

二　スピリチュアリティとは何か

本稿の目的は金子みすゞの「死の理解」と「スピリチュアリティ」の関係を明らかにすることである。しかし、スピリチュアリティの理解にはすべての人が一致する理解がない。本稿を進めるために、まずスピリチュアリティの定義を明らかにしておく。

(1) 一般的解釈

英和辞典ではスピリチュアリティ（spirituality）は、「精神性、霊性、精神的傾向（気風）」などと翻訳されている。[6] また、スピリチュアル（spiritual）は「精神的な」「霊的な」「神聖な」などと訳される。スピリット（spirit）は「（肉体を働かせたり肉体と魂とを媒介する）人間の生命力の根源」「人間の霊的部分」「（死んだとき肉体から分離すると見

なされる）魂、霊魂」と説明されている。[7] これでわかるように「スピリチュアリティ」は「宗教」と近似した概念であるが、音楽や美術の中にも見られる神秘性を表すこともある。[8] 身体や俗との対比で用いられることが多く、精神性や内面性、神聖さや敬虔などの訳が生まれる。神学者ゴードン・マーセルはスピリット（spirit）がラテン語のspiritusの派生語であり、その原義は「風」「息」を示している点に注目して、スピリットは個人や共同体を形づくる目に見えない力であると述べている。[9] さらにマーセルは「スピリチュアリティ」とは、「われわれの世界に意味・アイデンティティ・秩序・目的を授けるプロセスである」と述べている。[10] ここで注目することは、スピリチュアリティは人間のいのちや存在に意味や目的、さらにはアイデンティティを与える機能であると理解している点である。この解釈は英和辞典の説明の「精神性、内面性」「霊性」「神聖なもの」「敬虔」などよりもダイナミックな機能論的解釈である。スピリチュアリティやスピリチュアルケアの文献は今、多数公になっている。スピリチュアリティの本質や特徴については、他の書物や論文で論じたので、ここでは以下に示す定義とし、詳述はしない。[11] 特にスピリチュアルな健康がＷＨＯの常任理事会で問題になって以来、医療、看護、介護などの分野で熱心な議論がなされている。

（2）「スピリチュアリティ」を定義する

本稿では、「スピリチュアリティ」を「目に見えない超越的存在（神仏など）と関係を作る機能で、生命維持のための癒しの機能をもつ」と定義する。[12]

この定義は次のようなことを意味している。①「スピリチュアリティ」は超越的存在と関係を作る機能である。また、②「スピリチュアリティ」はこの世に起きる出来事に宗教的意味を認識する感性と垂直的関係を見る視点をもつ機能である（神仏の愛や慈悲の認識）。また、③「スピリチュアリティ」はいのちの危機（死、喪失）で顕著に覚醒し、生命

維持のために癒しの機能として働く。④「スピリチュアリティ」は宗教的であるが特定の宗教を超えた機能をもって、すべての宗教を肯定する機能をもっている（全体的、総合的、統合的機能）。⑤「スピリチュアリティ」は、宗教と近似的であるが、宗教に限らず、神秘的音楽、崇高な絵画、高貴な文学、すべてのいのちを育む自然などにも表現されていると言える。[13]

本稿では以上のように定義し、以上のような機能をもつものとして、この五つの機能が作品「雪」の中でどのように表現されているか、そして死とどのような関係をもっているかを考察する。

三　作品「雪」

（1）作品「雪」[14]

誰も知らない野の果（はて）で／青い小鳥が死にました／さむいさむいくれ方に
そのなきがらを埋めよとて／お空は雪を撒きました／ふかくふかく音もなく
人は知らねど人里の／家もおともにたちました／しろいしろい被衣（かつぎ）着て
やがてほのぼのあくる朝／空はみごとに晴れました／あをくあをくうつくしく

小さいきれいなたましいの／神さまのお国へゆくみちを／ひろくひろくあけようと

(2) 作品「雪」の解説

作品「雪」は全体が五連で構成されている。全体は「青い小鳥の死」を中心にして「お空」の愛・慈悲が詠われている。

広い空を美しく飛んでいた小鳥に危機が訪れた。誰も知らない野で美しい青い小鳥が死んだ。小鳥の死に気づく人もなく、まして悲しむ人さえいなかった。小鳥のいのちは注目されることもなく、見放された寂しいものだった。哀れな小鳥の屍骸を埋めるように「空」から雪が降ってきて、白い雪綿で小鳥を包んだ。小鳥は雪の愛で丁寧に葬られた。人気のない里の出来事であったにもかかわらず、小鳥の死を心から悼むものがいた。それは真っ白い雪で被われた家である。「被衣着て」は、寒い夜の葬儀に高貴な女性が着た衣服を示す言葉である。雪に覆われた家全体は、被衣を着て葬儀に参列する女性に似ていた。金子みすゞは白い雪で被われた家が葬儀の参列者だと受け止めている。小鳥はひとりぼっちではなかった。

葬いの夜が開けた翌朝は昨夜とは違って空は晴れ渡った。「空」が青い小鳥の死を悼んで配慮したのである。青い小鳥のたましいは晴れわたった空を「神さまのお国」へ戻っていった。

四　作品「雪」の死観・死後観・神仏観

作品「雪」は、題目は雪でありながら、内容は青い小鳥の死と「神さまのお国」が加わって、三つのテーマがある。そこで以下、死観、死後観、神仏観の順で考察する。

（1）死観[15]

金子みすゞは作品「雪」の中で、「死」をどのように理解して表現しているか。ここでは四点に絞って見てみよう。

①生物学的死

作品には「誰も知らない野」「さむいさむい」「くれ方」を重ねて、自然の中に生きる小鳥がイメージされている。「青い小鳥が死にました」には、身体として小鳥が自然の中に生きていたが、その生物学的生命が終わったことを告げている。自然に存在するものは、いつか生物学的生命の終わりを迎える。

②心理的・精神的死

小鳥が「誰も知らない野」で誰にも看取られることなく夕暮れに死んだとある。死がもつ哀しみが詠われているが、今までの生活の場から引き離されること、断絶させられる心理的・精神的寂しさや悲しみが詠われている。

③群れ、集団、共同体からの断絶

青い小鳥の死は仲間や群れとの断絶として語られている。これは社会的死と呼ばれていることである。「誰も知らない野」という表現には、人間の住む村から遠く離れた所が想定されている。青い小鳥も元々は自然や仲間と一緒に生きていたのであろうが、死という出来事で仲間の小鳥たちと分断させられ、一匹で寂しく死んだ。死によって仲間との関係が断ち切られて青い小鳥はひとりぼっちになってしまった。これは群れや集団からの断絶による死である。群れが互いの生命を支え合って生きている。それが絶たれる社会的死が語られている。

④宗教的死[16]

この作品では、「神さまのお国」と詠われて宗教的死後観が語られている。死んだ青い小鳥が「神さまのお国」へ行くと詠われていることで、たましいの行き場が語られる。それは宗教的救済であり、生物学的、精神的、社会的死からの救済を語っている。彼女が死の悲しみの解決を宗教的救済に求めたことは明らかである。

(2) 死後観

彼女の死の理解について先に見たが、彼女は死後の世界をどのように見ていただろうか。

①死後の世界の確実性

「神さまのお国へゆく道を／ひろくひろくあけようと」という表現には、「神さまのお国」が確かな存在としてすでに

あると信じていたことが明らかである。それは青い小鳥のたましいを「迎える」ためだと理解ができる。彼女の中では死後の世界は確かなものとして存在していて、いのちは帰る場があるという希望があったと考えられる。

②死の国の自由と美しさ

「神さまのお国」は死後のたましいが行く死後の世界である。ここで語られる「神さまのお国」はキリスト教の天国ではない。すでに述べたように仏教の影響を受けた彼女にとっては、阿弥陀様の国、極楽浄土をイメージしていたかもしれない。敢えて、「神さまのお国」と言った理由は、キリスト教の神でもなく、仏教の阿弥陀でもないいのちの根源をイメージしていたからではないか。ここでは死後の世界ですべての束縛から解放されて自由になると語っている。彼女は死後に「苦難からの解放の世界」、自由の世界があると考えている。

彼女の作品「万倍」[17]では、「空のむこうの神さまのお国」は、「星で飾った夜の空」や「水に映った朝の虹」の美しさの万倍も美しい国だと形容されている。神さまの国は星で飾った夜の空や水に映った朝の虹のように美しい国だと言っている。このように彼女は、死後の世界を美しい国として受け止めていたことがわかる。

③故郷への帰還

この作品では小鳥のたましいは「神さまのお国」に帰っていくことが描かれている。つまり、ここには、たましいの故郷への帰還思想が見える。このようなたましいの帰還思想は他の作品でも見られる。作品「失くなつたもの」[18]の中に「そらのおくにへかへつたの。蓮華のはなのふるなかを、天童たちにまもられて。失くなつたものはみんなみんなもとのお家へかへるのよ」とあるが、「そらのおくにへかへつた」「もとのお家へかへるのよ」と明確に帰還信仰が見て取れる。

姫路龍正は次のように述べている。

> みすゞはいのちのかえる故郷、お浄土を見事に詩いあげ、阿弥陀仏のましますお浄土へかえらせていただき、そこでは無量寿のいのちをいただき、往生人として娑婆に生きているすべての生きとして生くるものを照覧したもうたのである。そして、やがて、自分のかえっていく永遠の故郷も、そのお浄土なのだと語ったのです。[19]

④宗教に縛られない死後観

彼女の「神さまのお国」は仏教の極楽浄土と解釈することも、キリスト教の天国とも解釈できる。しかし、特定の宗教の死後観と解釈するよりも、どこにも属さない超宗派なスピリチュアルな死後観である。その理由は、青い小鳥が「神さまのお国」に行くと表現していて、明確に「仏の花ぞの」や「浄土」としなかったことから、彼女の心には「神さまのお国」も「仏の花ぞの」も同じものと捉えていたと強く見られるからである。ここには既存の宗教に縛られない柔軟なスピリチュアルな思考がある。

(3) 神仏観

金子みすゞの宗教的世界はスピリチュアルな宗教観をもったことを見てきた。それではそのスピリチュアルな「神仏観」は、どのような特徴をもっているだろうか。詳しく考察してみよう。

①スピリチュアルな存在としての神

仏教では阿弥陀様、キリスト教ではイエス・キリストの父なる神さまという用語が用いられる。先にも書いたが彼女の作品には、「み仏」と「神さま」が混在しているが、彼女はその両方を統合するスピリチュアルな総合的な神を示したかったように見える。日蓮宗の僧侶の石川教張は作品「蜂と神さま」について次のように書いている。

> みすゞのいう「神さま」は、特定のひとりの神さまを指していない。蜂にも花や庭や土塀にも、町から日本へ、日本から世界への広がりのなかにも命が確実にあり、「神さま」は世界や日本や町のなかに、土塀と庭と花のなかに、そして小さな蜂のなかにいる。……これはまた森羅万象のなかに神や仏が宿っているということであろう。「神さま」はそうした命の輝きの象徴的な方であろう。[20]

石川は、明確に彼女は特定の宗教を超えていたと語っている。彼女の「神さま」という用語は、キリスト教や仏教を超えるスピリチュアルな神である。

②「お空」に現された神

スピリチュアルな神とは、特定の宗教に縛られない神である。既存の宗教から影響を受けつつも、それにだけ限定されない神である。作品「雪」では「お空」が、人の感情と共感する神として詠われている。「お空」が神の象徴的表現である。また、「お空」は仏の象徴的表現にもなりうる。スピリチュアルな神仏はこのような名称を変えることができる柔軟性をもっている。

③共感する神、遍在する神

金子みすゞは、「お空」に意志や労りの心を読み取っているが、それはスピリチュアルな神といえる。スピリチュアルな神は、自然、植物、動物などを統合する超越者（神仏）である。彼女は自然のいのちの中に阿弥陀の慈悲や意思を読み取りながら、それを特定の宗教に結び付けない。生き物すべてにいのちを与えているスピリチュアルな神を見ている。青い小鳥のいのちも死も死後の世界も、すべてスピリチュアルな神のもとにあるのである。

別の作品、例えば、作品「夕顔」では夕暮れに咲き始める夕顔はひとりぼっちに見えるが、「神さまはいまこのなかに」一緒に居てくださると詠っている。[21] このような柔軟な解釈は既存の宗教では得られない自由な発想を可能にするスピリチュアルな宗教観である。また、作品「さびしいとき」には「私がさびしいときに仏さまはさびしいの」という言葉が出てくる。[22]「私がさびしいとき」に「仏さま」は共感して「さびしい」と語っている。このような発想もスピリチュアルな宗教観である。

（4）死の理解、死後の理解のまとめ

以上、彼女の死の理解、死後の理解を見たが、彼女は、死は悲しい孤独な出来事であるが、一方で苦しみからの解放として受け取っていたことが窺える。この地上の生活は悲しいことが多く、彼女には窮屈だったに違いない。特に人との付き合いのうまくない彼女は、この地上の生活よりも向こうの生活を望んでいたかもしれない。すでに見たように彼女は、死後の世界は美しい所であり、いのちの故郷で、いかなるものからも束縛されない所と理解していた。彼女は死

への憧憬をもちながら現実の苦難を生きたと言える。彼女の死の理解や死後の理解を形成したのは、仏教の影響が大きいと思われるが、仏教の枠を超えるものであった。

彼女は仏教の影響を深く受けていたにもかかわらず、ここで考察してきたように、特定の宗教に執着していない。彼女には「神さまのお国」や「み仏さまの花ぞの」などの名前は問題ではなかったのではないか。むしろ「青い小鳥のたましい」が温かく迎えられるいのちの故郷があることを示したかったと考えられる。「神さまのお国」が示しているのは、すべての宗教が示している死後の世界を表徴する用語であり、すべての宗教を肯定し統合するスピリチュアルな世界を示して孤独や悲しみの癒しを示したと考えるのが妥当である。

五　金子みすゞのスピリチュアルな世界

前の四で先行研究を概観したが、スピリチュアリティの理解には多様性があることに触れた。本稿では特にスピリチュアリティの特徴が五つあることをはじめに述べたが、この特徴を頭に入れながら、作品「雪」に見られる金子みすゞの「スピリチュアリティ」の特徴をまとめてみよう。

①スピリチュアリティは超越的存在と関係を作る機能である。この作品での「雪」は特別な機能を果たしている。気象学の「雪」ではなく、青い小鳥の死を悼み、労りの心をもつ存在として描かれている。ここでは「雪」は「神」の代名詞として用いられている。「雪」は青い小鳥の悲しみを十分理解し、受け止めて葬いを行い、神の国へと招く超越的存在である。

②スピリチュアリティはこの世に起きる出来事に宗教的意味を認識する感性と垂直的関係を見る視点をもつ機能である。青い小鳥の死は自然の出来事であるけれども、生物学的生命が終わり、身体が土に帰るだけで終わるとは、彼女は考えていない。生物学的生命は終わっても、小鳥のいのちを見守る超越的存在が居て、死後にも繋がっていると彼女は見て取った。小鳥と空の関係が生きた関係として描かれている。

③スピリチュアリティは人間に備わった生得的機能であるが、特にいのちの危機に直面して顕著に覚醒する機能である。青い小鳥が死んで、誰からも見放された状況に「空」が雪を降らせ葬いを行い、翌日には晴天をもたらせた。「空」は「神」の代名詞であり、人の危機的状況に機能することが示されている。いのちの危機で顕著に覚醒し、生命維持のために「癒し」の機能として働く。

④この作品では「神さまのお国」とあり、宗教的であるが、特定の宗教に偏っていない。「神さまのお国」はキリスト教用語であるが、一般的にも用いられる。特定の宗教者はこの曖昧な使用法を非難するかもしれない。彼女は敢えて明確にしないことで特定の宗教に偏ることを避けている。そうすることですべての宗教を肯定することになっている。「スピリチュアリティ」は宗教的であるが特定の宗教を超えた機能をもって、すべての宗教を肯定する機能をもっている。

⑤この作品は、死、死後の世界、いのちのはかなさ、いのちの断絶、孤独など宗教的テーマが扱われている。宗教と近似的であるが、宗教に限らず、神秘的音楽、崇高な絵画、高貴な文学、すべてのいのちを育む自然などにも表現されていると言える。特に、「神さまのお国」は死後の世界を示しているが、ここでは特定の宗教の教義、教理的言説には触れていない。むしろ目に見えない世界、純粋な世界、神秘の世界がイメージされていて、すべてのいのちがスピリチュアルな世界で肯定されていると語っている。

先にスピリチュアリティは宗教的でありつつ、特定の宗教に限らず、すべての宗教を統合するものであると述べた。彼女の作品「雪」では「神さまのお国」と詠っているけれども、彼女はキリスト教の「神」を意図していない。彼女はすべての宗教を統合するスピリチュアルな世界をイメージしていた。そこで彼女の他の作品でのスピリチュアルな世界の扱われ方を次に検証してみよう。

(1)「神」「仏」の肯定と統合

ここでは彼女が作品の中で「神」「仏」をどのような意味で用いているかを明らかにしたい。

彼女の全作品五一二篇で、「神さま」が出てくるのが六編、「仏さま」は五編である。「神さま」は、①「蜂と神さま」(全集Ⅲ)、②「夕顔」(全集Ⅲ)[23]、③「万倍」(全集Ⅴ)、④「みんなを好きに」(全集Ⅴ)、⑤「雪」(全集Ⅵ)、⑥「山と空」(全集Ⅵ)に見られる。

「仏さま」は五編、①「花のたましい」(全集Ⅲ)、②「さびしいとき」(全集Ⅳ)、③「お佛壇」(全集Ⅳ)、④「仏さまのお国」(全集Ⅳ)、⑤「お祖母様の病気」(全集Ⅵ)に見られる。

その他一編「桃の花びら」(全集Ⅴ)では、「おてんとさま」が神仏の代名詞になっている。合計一二編の中で「神」「仏」が扱われている。作品の表題に神仏が付けられたものは、「蜂と神さま」「仏さまのお国」の二つの作品である。彼女がキリスト教にどのようにして触れたのか、どのような影響を受けたかは、全く明らかにされていない。しかし、上記の作品から彼女がキリスト教に関心をもったことを窺い知ることができる。五一二編の作品の中では、「神」「仏」という用語は明確に定義されず使われている。それについて熊谷信子は、金子みすゞの中では「〈仏さま〉と〈神さま〉が併存していた」と書いている[24]。彼女は特定の宗教には関心がなかったからである。特定の宗教よりもそれを統合する

スピリチュアルな世界に関心があったと考えることが適切である。

（2）諸宗教を肯定するスピリチュアリティ

金子みすゞは特定の宗教に関心をもたず、自ら仏教徒とは意識していなかったのではないか。もしも、仏教徒と自覚していたなら、「仏」は特別の意味で使われるはずである。また、「仏」を使うときには、そこに彼女の個人的仏観が現れてくるはずである。彼女は「仏」「神」への特別の個人的信仰がなかったから、仏観、救済観、人間観を深めることもなく、それとともに、一つの宗教に偏り他を排除することがなかったと考えられる。

彼女は「神・仏」という二つの名前を使うことで仏教とキリスト教を包括するスピリチュアルな世界を考えていたと推察できる。彼女の神仏の世界は、特定の宗教を特定せず、むしろすべての宗教を肯定するスピリチュアルな世界だったと言っていい。[25] 彼女にとっては、すべての生きもの、魚、草花が肯定されると同時に、一つの宗教だけが正しくて、他は誤りだと否定されるものではなく、どの宗教も肯定されるはずだと考えたと想像できる。その根拠は、彼女が受けた宗教的影響の一つである浄土宗の経典『観無量寿経』には、「仏の心は大いなる慈悲の心であり、このわけへだてのない慈悲をもって、仏はすべての人々を摂め取られるのである」とあるからである。[26] 彼女はわけへだてのない仏の姿に宗教の本質を見たと考えられる。彼女は各宗派への寛容を学び、すべての宗派を包括する宗教世界があると信じていたのではないか。そして、その宗教世界は、スピリチュアルな世界である。

六　結語――金子みすゞにおける「死の理解」とスピリチュアリティ

作品「雪」は青い小鳥の死をテーマにしながら、単なる生物学的死だけではなく、精神的、集団的死をも暗示しながら、宗教的死を語っている。その悲しみや孤独の癒しをスピリチュアルな世界に求め、死後は自由な安らぎの世界であることを語っている。

彼女は、三歳の時に父を失い、一六歳の時に実母が上山松蔵と再婚して外へ出る。また実兄も結婚した。二三歳の時には親友の田辺豊々代を失った。彼女は死別や離別の悲しみを強いられていた。死は寂しく孤独で不条理なものだと彼女は実感していた。「小さいきれいなたましいの、神さまのお国へゆくみちを」と詠い、小鳥のたましいは神さまのお国に迎えられると語っている。この表現から彼女が死を地上の苦痛からの解放と理解していたことがわかる。この地上には苦しみ、哀しみ、痛みが満ちているが、そこから解放されるのは死を通してである。増田れい子は「金子みすゞの詩にあふれる精神のなかに、その根幹をなす要素に自由への渇仰をみることは、明白かつ妥当だと私は思う。……その詩と死のなかに私が見るのは……自由という美神以外には考えられない」と述べている。[27] そして、死後の世界は、仏教にも縛られない自由で美しい所とした。それは特定の宗教に限定することからくる束縛や排他性を排除するためだったと考えられる。ここには、スピリチュアルな視点から見直す自由な視点があり、超越的世界からの救いの手が差し伸べられるとしたスピリチュアルな感性と視点からの苦しみや悲しみからの救済が見て取れる。

彼女のこのような「死の理解」とスピリチュアリティは、現代人にとってどのような意味をもつであろうか。

（1）現代人のたましいの癒し

現代人の多くは、死を怖れている。死ねば灰になるだけだと受け止めることには科学的思考があるが、締念も見えてくる。彼女の作品はスピリチュアルな世界からの希望を示している。スピリチュアルな世界ではすべての「いのち」も「死」も、超越的次元から肯定されるからである。死は肉体としての別れであるが、スピリチュアルな思考では「新しい世界」への出発である。超越的次元からは、すべてのいのちが過去、現在、未来と関わり、すべてのいのちが絆で結ばれて、存在全体がスピリチュアルな世界の中で本来の在り方を回復する。[28] それは人間を超えた大きな視点から生死、死後のいのち、人間を見直すことであり、本来の「いのち」の在り方の回復である。それは、宇宙の全体性の中で、すべてのいのちが結ばれ、生かされていることを再発見するスピリチュアルな理解から生まれてくる。金子みすゞは、人生の不条理や矛盾や不自由さを感じながらスピリチュアルな世界に救いを見出していた。

（2）宗教的香りの源泉

作品「雪」は青い小鳥の死が詠われ、死の悲しみや哀れさが詠われた。しかし、「お空」が雪を降らせて「青い小鳥のたましい」を神さまのお国に導いていく。そこには深い死の悲しみとスピリチュアルな救いが語られていて宗教的香りを放っている。また、「お空」の優しさや思いやりは、仏教的慈悲とも、キリスト教の愛とも理解できる。「神さまのお国」は仏教の浄土思想やキリスト教の天国の思想とも受け止められる。どちらかに決定できない曖昧さをもちながら非常に宗教的な香りを伝えている。「お空」の優しさや思いやりは、青い小鳥の仲間や自然からも見放された痛みや傷

を癒すものである。「お空」は青い小鳥の「たましい」が「神さまのお国」へ行く道を開いたのである。この表現で青い小鳥が神さまのお国に安らぐ姿が描かれ、宗教的救済が伝わってくる。この救済こそ彼女の作品の宗教的香りの源泉である。この宗教的救済が特定の宗教的用語を用いずに語られるところに彼女のスピリチュアリティの特徴がある。[29]

（3）スピリチュアルな宗教世界

彼女の作品の中では「神さま」「仏さま」の二つが使われていていることを述べてきた。そのこと自体が、彼女は特定の宗教に傾いていないことを示している。このようなキリスト教的な語と仏教の語を差別なく使用できたのは、彼女がキリスト教や仏教を超えた視点に立っていたからだと理解していい。一つの宗教に偏ることで他の宗教を否定、軽視することを彼女は好まなかったからである。すべての生きものが肯定されると同じように、すべての宗教が肯定されるスピリチュアルな世界を望んでいたのである。そのことは、年齢、性別、貧富の差、社会的地位の差、教養の差、信仰の有無、宗教生活の有無などに縛られない世界を望んでいたと言える。彼女は、死の悲しみや孤独の辛さを思えば、すべての人が無条件に安らぎの世界に入れてよいと考えた。彼女はこの世の束縛から解放するものとして死を理解し、安らぎの場として死後の世界を考えている

（4）既存の宗教を脱皮するスピリチュアルな宗教世界

彼女は仏教の影響を深く受けながら仏教の枠を超えることで、かえって宗教の本質に触れる結果になっている。宗教は本質的に教理や戒律を生み出すものである。しかし、その教理や戒律は他宗教を差別化し排除するものとなる。ま

た、教理や戒律が出来ると、宗教的枠組みを保持することに力が注がれて、人間がもつ生命力や自由が薄れてしまう。自由を重視した彼女の作品には、次のような特徴がある。

①教理や戒律に一切触れない。宗教的独断を全く感じさせない。
②特定の宗教的価値観しか認めない偏狭さを感じさせない。
③仏の慈悲を感じさせているのに、特定の仏教用語を使っていない。
④今、生かされていること自体に神仏の愛や慈悲を見て取って、教理や教団に無関係にスピリチュアルな真理を伝えている。

宗教的でありながら、特定の宗教の枠を超える視点の背後には、どのような人生を過ごそうとも、人は死を迎えなくてはならないという事実認識があるように見える。そして、それは非常に孤独な出来事である。だから彼女は如何なる人の死もスピリチュアルな世界では肯定され、受け入れられていることを伝えたかったと考えられる。既存の宗教の在り方に従ってはいないが、かえってすべての宗教の普遍的本質を示している。すべての「いのち」に注がれている神仏の無限の愛や慈悲が素直に語られて、それが読者の魂と響き合うのである。

(5) この論文の限界

今回の研究は、作品「雪」を中心に、彼女の死観、死後観をスピリチュアリティの視点から読み直した研究である。ここで得られた結果は彼女の作品の一面を明らかにしたにすぎない。五一二編の作品全部についてスピリチュアリティ

の視点から見直すことは筆者の力の範囲を超える作業である。今後の研究に期待するしかない。

注

(1) 矢崎節夫『童謡詩人金子みすゞの生涯』JULA出版局、一九九三年。本稿での金子みすゞの生涯のすべての出来事は、矢崎の書物からの引用である。

(2) 窪寺俊之「金子みすゞの自死と宗教学的考察」臨床死生学第18／19巻第1号、二〇一四年、六八—七六頁。

(3) 姫路龍正『金子みすゞの詩情の底に流れる慈悲——浄土真宗に生きたみすゞ』探究社、二〇〇三年、二二頁。

(4) 酒井大岳「もののいのちと自分の命と」、矢崎節夫ほか著『金子みすゞのこころ』佼成出版社、二〇〇二年、一三三頁。

(5) 金子みすゞの生まれ育った仙崎は、今でも自然豊かで宗教の盛んなところである。筏丸けいこは「ふるさとのむこうにあるもの」と題する文章で仙崎の自然や文化を美しく書いている。『金子みすゞ——魂の詩人』(文藝別冊)、河出書房新社、二〇一一年、九〇—九五頁。通(かよい)という場所にある向岸寺の鯨墓は丘の上にあり海を見渡す美しい光景が広がっている。

(6) 小学館『ランダムハウス英和大辞典』小学館、一九七三年。

(7) 窪寺俊之『スピリチュアルケア序説』三輪書店、二〇〇四年、五—八頁。

(8) 窪寺俊之「スピリチュアリティの現在——人間学的立場から」、谷山洋三、伊藤高章、窪寺俊之『スピリチュアルケアを語る』関西学院大学出版会、二〇〇四年、八二—一〇二頁。

(9) Gordon Mursell, *The Story of Christian Spirituality: Two Thousand Years, From East to West*, Lion Hudson, 2001. ゴードン・マーセル監修、G・マーセルほか著『キリスト教のスピリチュアリティ——その二千年の歴史』青山学院大学総合研究所

訳、新教出版社、二〇〇六年、五頁。ヘブル語での霊性はルーアッハ（ruah）で、ギリシャ語ではプニューマ（pneuma）である。それぞれは息や風を意味する。

(10) 同上書、五頁。

(11) 窪寺前掲、『スピリチュアルケア序説』、六―八、二九―四二頁。

(12) 窪寺俊之『スピリチュアルケア入門』三輪書店、二〇〇〇年。

(13) 窪寺前掲、「スピリチュアリティの現在」、八二―一一三頁。

(14) 金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集Ⅵ』ＪＵＬＡ出版局、二〇一一年、八二―九三頁。

(15) 今野勉『金子みすゞふたたび』小学館、二〇一一年、三六一頁。今野勉は作品「雪」が「死そのものを詠んだ唯一の詩だ」言っているが、作品「雪」以外の作品「お葬ひごっこ」「にぎやかな葬ひ」「大漁」「繭と墓」「金魚のお墓」「雀の墓」「お魚」「犬」「鯨法会」なども死を扱っている。これらの作品には複数のテーマが含まれているが、「死」一つに絞り切れない側面があるので、今野の解釈でも間違いない。

(16) 死の悲しみについては、「犬」「鯨法会」という作品がある。作品「犬」では「酒屋のクロが死にました……いつでも、おこるおばさんが／おろおろ泣いて居りました」。死んだ犬を悼んでいつでも怒る酒屋のおばさんが、おろおろ泣いていたと詠う。強い人さえ泣かせたのはクロとの惜別の苦痛である。作品「鯨法会」では「沖で鯨の子がひとり／その鳴る鐘をききながら／死んだ父さま、母さまを／こひし、こひしと泣いてます」とある。鯨の子は親を失って、一人沖を泳いでいた。ここには親を奪われた鯨の子の悲痛な叫びが表現されている。

(17) 作品「万倍」、『金子みすゞ童謡全集Ⅴ』、九二―九三頁。

(18) 作品「失くなったもの」、『金子みすゞ童謡全集Ⅲ』、二一〇―二一一頁。

(19) 姫路、前掲書、六三―六四頁。

(20) 石川教張、山本龍雄、尾崎文英『金子みすゞいのちのうた2』ＪＵＬＡ出版局、二〇〇三年、二七頁。

(21) 『金子みすゞ童謡全集Ⅲ』、一二四―一二五頁。

(22) 『金子みすゞ童謡全集Ⅳ』、四八―四九頁。

(23) 「夕顔」という同名の作品が二つ残っている。全集Ⅰの五四頁と全集Ⅲの一二四頁にある。神さまが出てくるのは、全集Ⅲ

の一二四頁である。

(24) 熊谷信子「仏さまと神さま」、詩と詩論研究会編『金子みすゞの世界』勉誠出版、二〇〇二年、一六七頁。

(25) 彼女のこのような考え方はジョン・ヒックの宗教多元主義と共通するものがある。現代イギリスの神学者・宗教哲学者であるヒックは、キリスト教が主張する自己の絶対性に疑問をもち、諸宗教の共生を求めた。彼によれば宗教は霊的力によって生み出されるもので、他宗教を排斥するものではない。「みずからの伝統内に踏みとどまりつつ、他の伝統を敵対するものと考えないで……実在者に対する対応と考える」という宗教の共存を主張している。ジョン・ヒック『宗教がつくる虹――宗教多元主義と現代』間瀬啓允訳、岩波書店、一九九七年、vi頁。John Hick, *The Rainbow of Faiths, Critical Dialogues on Religious Pluralism*, SCM Press, 1995.

(26) 浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉編纂『浄土三部経』本願寺出版社、二〇一三年、三二七―三二九頁。

(27) 増田れい子「金子みすゞは自由を愛した」、『金子みすゞ――魂の詩人』(文藝別冊)、河出書房新社、二〇一一年、一〇一頁。

(28) 「スピリチュアリティ」のもつ機能の一つは、いのちの根拠の回復である。それを「癒し」と言い換えることができる。英語では癒し (heal) は to be whole で、日本語では回復、和解などと訳される。いのちの全体性の回復である。特にいのちのもつ垂直的関係の回復をスピリチュアリティの機能としてもっている。窪寺前掲、『スピリチュアルケア序説』、六一―六六頁。

(29) 「宗教」と「スピリチュアリティ」の定義を文章化する作業が行われている。Doug Oman, Defining Religion and Spirituality の中で「宗教」と「スピリチュアリティ」の定義を多角的視点から分析、考察している。ちなみに、両者の歴史的背景から始めて、両者の関わるテーマの違い、両者の言葉がもつ深さと広さ、主観的解釈・機能的解釈、スピリチュアリティの社会的側面・歴史的側面・文化的側面などにも触れている。著者D・オーマンの主旨は、両者の解釈の多様性を文献をもとにして丁寧に紹介することであって、その点で有益な紹介と考察がなされている。ただし、オーマン自身の定義は紹介されていない。参照 Raymond F. Paloutzian and Crystal L. Park (eds.), *Handbook of The Psychology of Religion and Spirituality*, 2nd ed., Guilford Press, 2013, pp.13–47.

参考文献

窪寺俊之『スピリチュアルケア入門』三輪書店、二〇〇〇年。
窪寺俊之『スピリチュアルケア序説』三輪書店、二〇〇四年。
窪寺俊之『スピリチュアルケア学概説』三輪書店、二〇〇八年。
窪寺俊之編著『癒やしを求める魂の渇き――スピリチュアリティとは何か』スピリチュアルケアを学ぶ1、聖学院大学出版会、二〇一一年。
窪寺俊之編著『スピリチュアルペインに向き合う――こころの安寧を求めて』スピリチュアルケアを学ぶ2、聖学院大学出版会、二〇一一年。
窪寺俊之編著『スピリチュアルコミュニケーション――生きる希望と尊厳を支える』スピリチュアルケアを学ぶ3、聖学院大学出版会、二〇一三年。
窪寺俊之編著『スピリチュアルケアの実現に向けて――「第18回日本臨床死生学会大会」の取り組み』スピリチュアルケアを学ぶ4、聖学院大学出版会、二〇一三年。
窪寺俊之編著『愛に基づくスピリチュアルケア――意味と関係の再構築を支える』スピリチュアルケアを学ぶ5、聖学院大学出版会、二〇一四年。